



# アルジャーソンに花束を

---

---

ダニエル・キース

---

## 主人公は父であり、私自身でした

---

わたしの記憶の中で父はやたら怒鳴る人間だった。物心ついた頃からそんな父が嫌いだった。父の子育てのモットーは「3歳までに殴ってでも蹴ってでも親の言うことを聞くようにしなければならぬ」であった。当時「それが親の愛情なのだから、親を悪く言ってはならぬ」という価値観がまかり通っていた。そのため父への憎しみを抑えつけて生きていた。暴力を振るい、怒鳴る人間をどうやって好きになればいいのだろうか？ 自分の本心を認めることもできず、感情に気づかないふりをして生きていくしかなかった。

父はわたしが高校1年生の時パーキンソン病で倒れた。このまま死んでしまえばいい。それがまぎれもなくわたしの本音であった。再度父が倒れたのはわたしが20代後半の時だった。父は難病を併発した。病院に駆け付けたわたしの目に映った父は、生きるしかばねでしかなかった。ドクターから病状説明を受けた兄から話を聞かされた。次、発作を起こせば死ぬ。ただし、いつ発作が起こるのかは予測が全くつかない。発作を予防することは現代医学では解明されていない。鼻から管を通され、病室のベッドに横たわる父の生きている意味をどうしても見出すことができなかった。

その頃、わたしと同じように、子どもの頃、子どもらしい感情と向き合うことなく大人になってしまった人同士で話し合うグループのミーティングに通っていた。毎月行われるミーティングの場で、ひたすら自分のこと、自分の親のことを話したければ話し、話したくなければ沈黙が続く会だった。自分と同じような精神的課程を経由し成長してきた人の話を聞くことで、自分自身の姿がだんだん見えてきた。わたし自身、自分の中に封印してきた感情を憤りながら泣きながら吐露した。本当は自分の感情にいいも悪いもないのだ。感じたことは真実でしかない。それと同じように父も自分の子育てが正しいと信じていて、他のやり方を知らないだけだったのだ。父への感情を整理することで、わたしの中のわだかまりは徐々に溶けていった。それにも関わらず、もう一人のわたしが「絶対に許さない」と息巻いていた。

そこで知り合った女性が「ダニエル・キース」の作品が好きで「アルジャーノンに花束を」がよかったと教えてくれた。わたしはさっそく「アルジャーノンに花束を」を読んでみた。正直びんとこなかった。

父が植物状態になって2年半、ある朝夫が「留守番電話にメッセージ入ってる。お父さん夕べ夜中に亡くなったって」と神妙な面持ちでわたしを起こした。

すぐに留守番電話に切り替わってしまったせいなのか着信音に気がつかなかったようだ。

あわてて実家に行くと、親戚が大勢集まっていた。布団に横たわる父は全ての装置が外され、冷たくなっていた。葬儀というのは便宜的だと思う。諸々の付属物が伴い、残された関係者はあたふたと忙しい。お構いなく日々は流れ、葬儀から2週間ほどたった頃、幼馴染の親友が電話をくれた。

「お父さん、亡くなったって聞いて」

親友と呼べる人はそう多くはない。その中で彼女は子どもの頃から、いつも話を聞いてくれていた。父への不平不満を泣きながら話すと、一緒に泣いてくれた。

「お父さんは純粹で、残酷な人だったと思う」と彼女に話しながら涙が流れてきた。

「そうだね。きっと純粹で残酷な人だったんだね」と昔と全く変わらず、わたしの気持ちを受けとめてくれた。親のことを悪く言うのはよくないなどと一言も否定することはなかった。その後、彼女は手紙をくれた。電話で話したことと同じような内容だった。しかし、きれい事でも叱咤でもない、わたしを包み込むような一言一句に救われるような思いだった。

しばらくして、わたしはもう一度「アルジャーノンに花束を」を手を取った。「アルジャーノンに花束を」の主人公は精神障害者で、手術によって天才的知能の持ち主に変わる。その結果、それまで見えなかった周囲の人間のいびつき、見下した態度、ねたみと対峙しなければならなくなる。ところが天才的頭脳を保つことはできなかった。やがて主人公は、何もかも全て受け入れ精神障害者へ戻っていく。

主人公の姿が植物状態の父と重なった。父の場合は、あんな姿になりながら周囲に影響を与えていた。父があのような状態であったからこそ、わたしは生きること、死ぬこと、幸せと不幸、親とは子どものためにどうあるべきか、これでもかというほど考える機会を与えられたと思う。

父が生きている時点で、残念ながら和解することはできなかった。とてつもなく長い時間をかけて、父と自分の全てを受け入れられたと思う。「アルジャーノンに花束を」はそのきっかけをくれた。